

科学忍者隊ガッチャマン（クリスマス）ファンフィク

COUNTDOWN

裕川 涼

● PHASE 1 プロローグ

「おい、南部、本当にいいのか？ 相手は特殊部隊の格闘技の教官だぞ」

鷲尾健太郎が、南部考三郎の肩を叩いた。南部は、キヤスター付きのラックに入れて運び込んだ装置を、延長コードにつないで、手早くスイッチを入れた。ラックの中では、オシロスコープや発振器と一緒に、基盤を何枚も挿したコンピュータらしき部品が剥き出しになっていた。

「かまわないさ。それくらいでないとテストにならん」

「勝つつもりでいるのか」

「まさか」

南部は、大型のダイバーウオッチよりもさらに一回り大きな部品を、左手首にベルトで固定した。白衣を

脱ぎ捨てる。黒いシャツと黒いズボンを身に付けた、細身の体が現れた。ラックのコネクターと左手首の装置のコネクターを細い同軸ケーブルで繋いだ。

「そりや一体何だ？ さっきのとは違うのか？」

黒いシャツの裾からテープ状の極細のケーブルが束になって伸び、小さな箱につながっていた。箱はクリップでベルトに差し込まれていた。ケーブルの先端は各種のセンサーになっている。そのセンサーを南部の全身に貼り付ける作業を、ここに来る前に、鷲尾は一時間以上にわたって手伝った。

「空軍勤務の俺に、国際科学技術庁の研究に手を貸させてオーダーが降ってきたから、何かかと思って来てみたら、セコンドをやれとはな。プロ中のプロを相手にどうするつもりなんだ？」

「見てりやわかる。これを持っていてくれ」

南部は、眼鏡を外して鷲尾に手渡した。

「動くものを見るときには却って邪魔だし、バイザー越しでも無い方が安全だ。始めるぞ」

南部は、いかにも手作りの基盤が刺さったケースのボタンを押した。瞬間、全身が光に包まれた。光が消えた時、南部の体は、全身黒色のボディスーツに覆われていた。膝上まであるブーツに手袋、ヘルメットに顔の半ばまで覆う透明なバイザー、膝上まで届くマン

ト。

「バットマンの仮装のつもりか、それは？ ISOってのは妙なものを作るな……」

胴体と両手両足にプロテクターをつけ、ヘッドギアをかぶった格闘技の教官が素つ頓狂な声を上げた。

「デザインまで手が回っていないんだ。調整次第で色も形もある程度は変更できそうなんだが」

「一体どういう仕組みだ？」

「機密に関わるから詳しいことまでは言えないが、ブレスレットの高周波に反応してこのスーツに形を変える材料を開発した。防御の性能が高いのと、人間の運動能力をある程度サポートする機能があるから、うまくいけば、将来は軍でも使えるかもしれない。今はまだ、個人ごとにかなり調整しないと使えないので、量産できないんだが……」

「軍に持つてくる時は、もうちよつとマシなデザインにしてもらいたいな、南部博士」

「考えておくよ」

「おい、南部、ちよつと待て」

鷺尾は、格闘技の教官が広げた荷物の中から小さなビニール袋を取り出した。借りるぞ、と教官に向かって目で合図する。封を切つて、透明なゴム状のマウスガードを取り出し、ドライヤーを取り出して加熱し

た。

「口を開けろ、南部。柔らかくなっているうちにしっかりと噛んでおけ」

ヘルメットのバイザーで顔の半ばまでが保護されていて、南部の口の周りはノーガードだった。この状態で攻撃がヒットしたら、前歯は無事では済まない。

「マウスガードを付け忘れるような素人相手に、フルコンタクトでやり合っているのか？ ISOに来たばかりの学者先生を病院送りにするのは気が進まないぞ」

教官が顔をしかめた。

「やってみてくれ。ただ、左腕のブレスレットへの攻撃は避けてほしい。こいつが壊れるとそこでテストは中止するしかない」

「壊れるとどうなるんだ？」

「元の姿に戻る。私の体にもかなりショックがかかるはずだ」

「時計をセットした。三分と一分でベルが鳴る。ボクシングと同じだ。始めていいか？」

南部と教官が揃つて頷いた。鷺尾は、タイマーのスイッチを入れた。

ベルの音とともに、何の予備動作も無しに教官が

距離をつめた。軽い右フックが南部のヘルメット越しに入った。南部はよろめいたが、そのまま踏みとどまった。両手の拳を上げ、ファイティングポーズをとった。がら空きになった脇腹に、教官は左足で回し蹴りを入れ、寸止めした。

「本当に素人か……」

「それじゃ困る。実際に打撃がないとテストにならない」

「じゃあ、最初の何ラウンドかはトレーニングしてやるから、体を馴らせ」

「わかった」

「ストレート五回、規則的に行くぞ。ヒットの瞬間、腕に力を入れて顔をガードしろ。次は右の回し蹴りだ。膝と肘で入るのを防げ」

型どおりの攻撃と防御を規則的に繰り返し返して、最初のラウンドが終わった。

「あと三ラウンドこれをやって、慣れてきたらランダムな攻撃に切り替える。タイミングを合わせて防御するか、躲すか、やってみるんだな。それから、常に相手の全身を見る。一個所に注目してるとフェイントを喰らうぞ。考える前に体を動かすんだ」

「それが極意か。こちらからの攻撃は？」

「まともにやっつたんじゃ当たらないと思うが、受けよ

うか？」

「ガードしてもかまわないから、頼む。それも実験項目だ」

——九十分後。

南部は立ち上がれなくなつて、持ち込んだラックに凭れて座り込んでいた。息が上がつてしまい、話すこともできない。マウスガードを外して無造作に投げ捨て、口を開けて喘いだ。

「怪我でもしたんじゃないのか？」

「それは無いと思うが……」

鷲尾に向かって答える教官の方は、息も乱れていない。

「その変な装備を外せるか？」

南部は、ラックにつながっているケーブルの先端をプレスレットに差し込んだ。ラックの緑のボタンを押すと、再び光に包まれ、一瞬で、元の姿に戻った。そのままゆつくりと横になる。

教官はしゃがみ込んで、南部の黒いシャツを上にくくり上げた。極細の信号線をサージカルテープで貼り付けられるだけ貼り付けた上半身が現れた。

「何だこりゃ？ ボディに入れる時はそれなりに手加減したから、内臓を傷つけるような打撲は無いはずだ

が」

「南部、剥がしてもかまわないか」

青い顔で南部が頷く。鷲尾は、手早くセンサーを固定していたテープを剥がした。

「大丈夫か？ 痛むところは？」

「……無い。眼鏡を返してくれ」

答えた後、南部は呻いた。鷲尾は、眼鏡をかけさせ、南部を横向きに寝かせると、背中をさすった。

「気分が悪いのか？」

南部は答えるかわりに歯を食いしばった。

「完全にバテたんだろう。普段から鍛えていたようには見えないからな。面白いスーツだが、本人のスタミナの問題までは解決できないようだな」

「……どう面白い？」

目を閉じたまま南部は呟いた。

「動きが極端にアンバランスなんだ」

教官は断言した。

「俺からの攻撃に合わせて防御したり躲したりする時の反応は鈍いし、はつきり言っつてずぶの素人だ。しかし、俺に対する攻撃は、フォームは素人だが速度はベテラン以上だった。無駄な動きがやたら多いから、予測するのも躲すのも簡単だったが、無駄が無くなれば、俺でも対応しきれるかどうかわからん。ジャンプ

力も体操選手並だ」

目を開けた南部が微笑んだ

「しかし、何でこんな妙なスーツを作っているんだ？ ちよつと前に、ISOで、もつと強力なバトルスーツを開発してるつて話で……テストには、俺の部隊の若いのが協力していたはずだが。そつちを使えば南部博士だって、そんなにバテることも無かつたんじゃないのか」

人間以上の力とスピードを出すために、筋肉に追従して動くモーターやアクチュエーターを装備し、防弾用の装甲まで備えたパワードスーツの開発が、既にISOの研究チームによつて進められていた。動力は外部から供給されるため、理屈通りに行けば、人間の側にさほどのスタミナを要求しなくても、簡単に、何人分かの力を出せる。

「あれは多分失敗に終わる。貴方は既にその理由を知っているはずだ。さつきも言っつていた通り……」

「どういう事だ？」

教官は訊いた。南部は直ぐに言葉を出せず、鷲尾に背中をさすられながら、吐き気を堪えていた。

「南部、おい、大丈夫か？ 辛いならあまり話さない方がいいぞ？」

「……いや、続けさせてくれ。折角協力してくれたん

だ」

南部は深呼吸した。

「私の動きが鈍いのは、貴方の動きを見ていちいち考えてから反応していたからだ。接近しての格闘戦の訓練はされてないから、私にはそれしかできない。しかし、自分から動く時は違う。筋肉の神経系が指令を出し始めるのは平均して〇・四秒から〇・三秒前、筋肉が動き始めるのはその〇・一五秒位後だ。脳が動作指令を出す前に、既に体は動いている。これは人間なら誰でも同じで、何も特別な訓練なんか要らない」

「そういえば、ISOの連中は、脳波を読み取ってスーツを動かすとか言ってたな」

「そうだ。それで最初の計画が失敗した。脳波をトリガーにしたのでは、体の動きから大幅に遅れる。研究チームは間もなくそのことに気付いて、筋電をトリガーにする方式に切り替えた。それでも、〇・一五秒の差は埋められなかった。動作開始が遅れるパワードスーツは、重量がある分、筋肉に対して動き始めに大きな負荷を与えることになる。それに合わせて人間の側が無意識に出力を調整した直後に、今度はスーツの方が増幅された動きを始めてしまう。ゆっくりとした動作のサポートならともかく、これではどうやっても格闘戦に合わせた制御など無理だ。〇・二秒先の

未来を完全に読めるのなら話は別だが」

「で、南部博士、未来を読むことには成功したのか？」

「さすがに私でもそれはできません。私のスーツも筋電に反応している」

「失敗例と変わらんじゃないか」

「フルコンタクトで試合をするのに、そのプロテクターが邪魔をしたか？」

南部は訊き返した。

「軽くて、抵抗なしに動くようなものなら、身に付けていても動き始めにはほとんど影響しない。私が狙ったのはそっちだ。そのかわり、性能の方は本人の身体能力に大きく依存することになったが……」

「なるほどな。筋はなかなか良かったぞ、南部博士。勘もいいし上達も早い。継続して鍛えればそこそこの所まではいくだろう。回復したら、毎日、グラウンド二十周はランニングしておくことだな。一ヶ月もすればそれなりに持久力は上がるはずだ」

教官は、持ち込んだ荷物の中を探り、手提げの紙袋を取り出した。

「クリスマスも近いしな、俺からのプレゼントだ。頼まれたとはいえ、サンドバッグ代わりにしてそのままというのも気が引ける」

「何だこれは？」

「湿布薬だ。俺の部隊で常備しているヤツだ」

南部は、紙袋を引き寄せた。どう見積もっても三キログラム以上ある。

「多過ぎないか？」

「全身にくまなく貼り付けて、二、三日は安静にしていろ。もつとも、明日は筋肉痛で身動きはできんだろうが」

南部は、教官に手を差し出した。握手をしたのか、引つ張り上げて立たされたのか解らない状態でどうにか立ち上がった。

「貴方に頼んで正解だった。スーツを改良したらまた協力を頼めるかな」

「了解だ。なかなか面白い装備らしいしな」

鷲尾に支えられながら、南部は格闘技の教官が立ち去るのを見送った。

「撤収するか……」

南部は、白衣を着込んだ。ラックのキャスターのストッパーを外し、引つ張ろうとしてよろめいた。鷲尾が慌てて腕をとって支えた。

「危ないから座ってろ。運ぶのを手伝おう。どこに持っていけばいいんだ？」

「装置はISO本部の私の実験室へ。私も一旦研究室に戻って、着替えてから帰る」

「ケーブルは外した方がいいんだな？」

「ああ、運ぶ途中で引つ掛かると断線するかもしれない」

「……つと、固いな」

鷲尾は、ポケットから折りたたみ式のプライヤーを取り出した。コネクタ部分を挟んで軽く回して外した。

「工具箱を持ち歩かなくてもいいのか」

「ああ。興味があるなら使ってみろよ。他にもいろいろくつついてる」

鷲尾は、南部にプライヤーを手渡した。レーザーマン、と刻印されていた。

「最初から俺の手伝いをアテにして俺を呼んだんだろう？ 自分が動けなくなるのを見越してな」

鷲尾は、ケーブルをまとめて、脇にあった袋に突っ込んだ。

「……バレてたか」

鷲尾は、南部の父親に雇われてパイロットを務めており、最近になって空軍に入った。南部とは、学生の頃から知り合いで、友人でもあった。

「自分で人体実験した心意気に免じて、荷物運びとドライバーは完璧にこなしてやる。積み込みが終わるまでそこで休んでいろ。何なら、湿布薬を貼り付けて

ミイラを作るところまで面倒見ようか？」

ラックを引っ張って出て行く鷲尾を、床に転がったまま南部は見送った。

● PHASE 2 I S O本部・アンダーソンのオフィス

「クリスマススイブだから一緒に早めに引き上げようと思っただけなのに、その荷物は一切何だ？」

南部を自らのオフィスに呼び出したI S O副長官のアンダーソンは、顔をしかめた。

南部は、薄いブルーのスーツの上着に紺のズボンにネクタイ姿で、ポケットには赤いハンカチを挿しているのはいつも通りだったが、服装には不釣り合いな軍用のダッフルバッグを担いでいた。

「この間丸三日も休んだせいで、仕事が遅れているんです。家に帰ってからも続きをやりたいんですよ」

事務方のクリスマス休暇を確保するために、イブの夜は早めに帰宅するように、I S Oの本部職員には通達が出されていた。必要最低限の警備部門だけを残して、研究室は年明けまでロックアウトされる。

「休んだってのは、特殊部隊の教官相手にぶつ倒れるまで殴り合った件か」

「あれから、ブレスレットの駆動用の装置を小型化

し、スーツの方にも改良を加えました。ここ数日はI S Oが使えないので、別荘の方の設備を使って研究を続けます。それには、道具一式を担いで帰らないと。試作品でも、重要機密ですから、誰かに頼むことはできないんですよ」

「まったく、近くのレストランに寄って、軽食でも摂らないか誘うつもりだったのに、それでは寄り道もできんじゃないか」

「済みません。しかしアンダーソン、あなたにとつては、寄り道などせず、家族と過ごす方がよろしいのでは？」

「あのな、これでも独身のお前を気遣ったつもりだ。少しは理解しろ」

言い終えた途端、アンダーソンの机の電話が鳴った。

受話器をとったアンダーソンは、ほとんど何も答えず報告を聞いていた。

「わかった、直ぐに行く」
それだけ言って、アンダーソンは受話器を置いた。

「何かあったんですか？」

「二ブロック離れたI S OのR & Dセンターで事故だ。地下実験室で爆発があったらしい。センター長と長官には呼び出しをかけているが、二人とも、昨日

からクリスマス休暇で直ぐには連絡がつきそうにない。食事に誘おうかと思つとつたが、それどころじゃなくなつたな。私は、行かなければならん。今ISOに居る最も職位の高いのが私ということになるようだ」

「私も行きます、アンダーソン」

「南部君、別に君には何の責任も義務もない」

「今、ISOには普段の人員は居ないはずだ。不測の事態が生じた以上、人手は多い方がいいでしょう。R&Dセンターには私も仕事を頼んであるので、それも心配です」

南部は、アンダーソンの先に立つて歩き出した。

● PHASE 3 ISO・R&Dセンター・一階

ISOのR&Dセンターは、地上部分は役員部の部屋や会議室などのある三階建てのビルで、実験室は全て地下にある。地下十階までは一般の実験室だが、その下は機密指定された材料を扱うフロアで、地下十五階から十七階まではISOのウラン工場のための基礎実験をしている放射線管理区域、地下十八階から二十階まではバイオの研究室で、最下層の二十階はP4実験室になっている。

警備室は一階で、机と一体になったモニター画面とスイッチが広い部屋に何列も並んでいた。各フロアの状況をモニターしているカメラの映像の監視と、セキュリティシステムの管理のかなりの部分をこの部屋から行っていた。

「ISO副長官のアンダーソンだ」

アンダーソンは、IDカードを警備主任に見せた。

「状況は？」

「三十分程前に、地下十四階の材料実験室と、最下層のP4で爆発が起きました。このため、エレベーターが二基とも地下十階で止まっています……そちらは？」

警備主任は、アンダーソンの後ろに立っている南部を見た。

「南部考三郎博士。私と一緒に仕事をしている」

南部は、スーツの内ポケットからIDカードを出した。

「南部です」

「警備主任のゴードンだ」

ゴードンと南部は握手を交わした。

「主任、中にはまだ人が居るのか？」

アンダーソンはモニターを見た。いくつかが切れているが、廊下や部屋を出しているカメラに動く人影

はない。

「クリスマスイブで元々人が少なかつたこともあって、ほとんどが脱出しました。しかし、十数人が取り残されているはずです」

「レスキュー隊は呼んだのか。我々が来た時、建物の前には消防車が何台か駐まっていたが」

「呼びました。中では火災が発生していますが、爆発の時に配管の一部が破損したらしく、自動消火装置がまともに働いていません。早く何とかしないと手遅れになります」

「それで、今は救助にあたっているのか？」

「それが……来て下さい」

警備主任が、警備室を出て、広い廊下の突き当たりエレベーターにアンダーソンを案内した。南部も続いた。

エレベーターの扉は、二つともジャッキでこじ開けられていた。荷物用を兼ねているため、扉の幅は四メートル近くある。アンダーソンと南部は中を覗きこんだ。

「暗くてよく見えない」

「どうぞ」

警備主任が渡した大型の懐中電灯を南部は受け取った。点灯し、下を照らす。止まっているエレベー

ターケージの上に、折り重なるようにして倒れているレスキュー隊員の姿が見えた。

「転落事故ですか？ レスキューともあろう者が……」

「いいえ。入った途端に攻撃されました」

「攻撃ってどういう事だ？」

「セキュリティシステムです。人が居るのをセンサーが検知したら、自動的に高出力のレーザー光線で焼かれます」

「何て酷い。こんな状況なのに、セキュリティシステムを止めておかなかったのか？ 不必要な犠牲者を出して……」

「無理です、副長官。もともとこの施設は、軍事機密並の情報を取扱うために作られました。警備室がテロリストによつて占拠されても、各フロアの侵入検知・迎撃システムは勝手に動き続けます。自家発電装置も各フロアにありますから、そう簡単には止まりません。エレベーターのレーザは、我々も一旦電源をカットしたのですが、途中から自家発電装置に切り替わって動き出しました」

「軍の特殊部隊に応援を頼めないか」

「連絡は入れました。しかし、無駄な犠牲は出せない」と……」

「国連軍の特殊部隊は腑抜けの集まりか？」

「違うんです、副長官。問題は時間です。地下のバイオラボではもうカウントダウンが始まっています」

「何の話だ？」

「P4の封じ込めです。もし、微生物による汚染があったとシステムが判断した場合は、一定時間後に内部を焼却します。今回は、爆発で入退室時の滅菌の装置に不具合が生じた上に、爆発の振動によって保管庫内での試料の破損も確認されているため、システムがP4内の汚染有りと判断しています」

「人が居たらどうなる？」

「微生物を封じ込めても、人が付着させたまま外に出てきてしまったのでは意味がありません。内部で汚染の除去と滅菌が完了しない限り、誰も脱出できません。例えば、どんな高名な学者でも……」

「何？」

「実は、今日の午前中からスタンレー博士が何人か引き連れて来ているんです」

「スタンレー博士って、あの遺伝子工学の権威か？ここ数年毎年ノーベル賞候補にあがっている？」

「そうです。長官直々の招待で、一週間ほど前から研究員と一緒にここに来て、P4の実験を視察していました。しかし、脱出した人の中には姿がありませんでした。P4にはまだ三人居ます。入退室管理の記録

からみて、おそらくスタンレー博士と、博士が連れてきた助手の方ではないかと。何とかして救いたいのですが……」

P4では、宇宙服のような防護服を着用することになっていて。防護服に通信機能はないし、P4に居る限り脱ぐことは不可能から、実際に誰がどこに居るかは監視カメラ越しに見ただけではわからない。入室と退室の時には、IDカード兼用のカードキーを使うので、誰が中に居るかという情報は記録されている。

「何てことだ……。このままだとISOがスタンレー博士を殺すことになるぞ」

アンダーソンが呻いた。

「最下層まで到達しなきゃならんということか。アンダーソン、この建物の設計図とセキュリティの仕様の資料を全部集めてくれ。方法を考えよう」

「できるか？」

アンダーソンは、ゴードンに訊いた。

「もう集めてあります、警備室に。レスキュー隊には真つ先に伝えたんですが」

南部とアンダーソンは警備室に戻った。コンソール脇の広い机の上に、図面が積み上げられていた。南部は、順番に図面を見ていった。

「空調用のダクトは、うかつに踏み込んだら百メートル

ルばかり自由落下することになるし、脱出には使えない。一階からの進入経路は、あのエレベーターシャフトしかない。地下に降りてしまえば、上下の移動ルートとして、電源ケーブルの配線用のダクトも使える。保守点検のために梯子が設置されているから、脱出経路にもなる」

「どのダクトにも自動迎撃装置があります」

「そこもレーザーか？」

「いいえ、ガスです。高濃度の炭酸ガスを出すようになっていきます」

南部は、俯いて図面を見つめた。左右に分けた茶色の髪が、眼鏡の上から目にかかった。それでも、鳶色の瞳は動かなかった。

「何とかなるかもしれない」

南部は顔を上げた。

「そうか、南部君。何か思いついたんだな？ 早速レスキュー隊に連絡して……」

「その必要はありません。行くのは私一人です」

「そんな無茶な」

「レスキュー隊には、私が入った後、エレベーターシャフトに縄梯子と電動ウィンチを設置するように頼んでください。それと、担架の用意を。戻ってくる時には怪我人が居るかもしれない」

南部は、来たときに持っていたダツフルバッグを担いだ。

「身に付けられる小型のバッグを用意してくれ。携帯用の酸素ボンベをレスキュー隊から借りてほしい。懐中電灯と通信機の準備を頼む。設備点検で使っている鍵があればまとめて貸してくれ。それから、スコープ付きのライフル銃と弾薬、小型の自動拳銃があれば有り難い」

「銃ならそのガンロッカーにある。他のものもすぐに準備しよう」

ゴードンが命令した警備員が、外に駆けだして行った。

隣の部屋は空いているな。ちよつと借りて着替えてくるよ」

「南部君、まさかその開発中のスーツを使うのか？」

南部は立ち止まり、自らの上着とズボンを眺めた。

「このスーツにネクタイよりは、ずつと動きやすいと思うが」

廊下に出たアンダーソンが煙草を取り出したのと、隣の部屋から着替え終わった南部が出てきたのが同時だった。南部は既にスーツの変形を終えていた。バイザー越しにアンダーソンは南部の目を見つめた。

「それが例のスーツか」

アンダーソンは煙草に火を付けた。

「南部君も一服するか？」

「それよりも、そのライターをお借りしたい」

南部は、アンダーソンの手からきれいに磨き上げられたオイルライターをもぎ取った。

「貸すのはいいが……ちゃんと返せよ」

「南部博士、用意できました」

ゴードンが、肩から掛けるバッグとライフル銃を持ってやってきた。南部はバッグを受け取り中を確認した。そのまま肩に斜めに掛けた。

「ライフルを貸してくれ。まず、ここから、できるだけレーザーを潰す。あのケージより上に設置されているものは、直線で見通せる場所にあるからな」

南部は腹這いになってライフルを抱え、シャフトを覗きこんだ。銃声が立て続けに響いた。南部は、レーザー光の方向を変えるために取り付けられた反射鏡を、一つずつ壊していった。

「向きが変わらない光なら、単に避ければいいだけだ。発振装置は壁に埋め込まれているから、降りる時に破壊する」

「凄い腕だな……」

投光器を片手に双眼鏡で見ていたゴードンが呟い

た。

「ケンブリッジでもオックスフォードでもチャンピオンだったそうだな」

アンダーソンが声をかけた。

「昔の話だ」

「本当に一人でいいのか？」

「ここから先は、セキュリティシステムを作った奴との勝負だ。大人数でがむしやりに進んだところで、犠牲者が増える一方だろう」

「確かに、妙に嚴重ではあるが……」

「図面を見て思ったんだが、このシステムを開発した奴は、人間が最大のセキュリティホールだと考えていたらしい。動作にあたっては徹底的に人的要因を排除することを目指したようだ。確かにその考え方は正しいが、正直、ここまで徹底しているシステムを見たのは初めてだ。その上、一旦侵入された場合は、内部の人間を犠牲にしても侵入者を生かしては帰さないという意図がはっきり見えている。設計した奴は並外れた才能の持ち主のようだが、何だか歪みを感じる」

「確か……このシステムの開発者はデーモン博士です。博士の自信作だそうで。いつぞやの講演会でも、ISO直々の依頼だったので存分に腕を振るったか

ら一種の芸術品の域に達しているし、破れる奴などそうそう居るはずがない、とおっしゃってました」

ゴードンが答えた。

「デーモン博士？……あの男か」

「アンダーソン、知ってるのか？」

「ISO始まって以来の天才と言われている。君よりは少し年上だが、いずれは長官だろうと噂される人物だ。今はその才能をかわれて軍に出向しているはずだ」

「覚えておこう」

南部は通信機を取り出し、ヘルメットを脱いで、マイク付きのイヤフォンを耳に引っかけた。ヘルメットをかぶり直してスイッチを入れた。

「聞こえるか？」

同じ言葉を、ゴードンが持っているトランシーバーが発した。

「入るぞ。警備室からサポートを頼む」

南部は、ベルトにブローニング・ハイパワーを引っかけたまま、エレベーターを吊しているワイヤーに飛びつき、下に向かって滑り降りた。

● PHASE 4 R&Dセンター・エレベーターシャフト

「スーツのおかげで握力は上がっているはずだが、それでも止まる方が大変だ……」

南部は呟いた。ワイヤーにさび止めが塗りたくられているために、相当強く握らないとずると滑り落ちてしまう。ワイヤーを握ったまま滑り降りても、掌が多少熱くなるだけで、手袋の方は大して摩擦もしていない。

「強度は問題ないが滑り止めをどうするか考えないと」

左手でワイヤーを握り、ゆっくり滑り落ちながら、南部は右手で拳銃を構えた。シャフトに穴を穿って一フロア毎に二箇所埋め込まれたレーザの発振装置を狙い撃ちして破壊した。狭い場所での射撃は跳弾の方が怖い。穴に埋め込まれた装置に確実に打ち込む以外に、跳弾を避ける方法は無い。

「しかし、発振器の設置場所をランダムに変えてあるとは、面倒な……」

発振器と同じ高さまで降りる度に、南部は一周ぐるりと見回す羽目になっていた。装弾数の多いブローニング・ハイパワーを選んで持ってきたが、途中で弾切れした。南部は、左手でロープを握り締めたまま、口でマガジンをくわえて引き抜いた。バッグのポケットに入れて置いた予備の弾倉を右手だけ使つて

装填する。その作業の間にもワイヤーを握った左手が滑り、フロアの半分程度の高さを降りてしまっていた。交換終了と同時に南部は発砲した。目の高さに来ていた発振器が、光学部品の破片をまき散らした。

最後の一つを破壊し、南部は、ケージの上に飛び降りた。跪いて倒れているレスキュー隊員を抱え起こした。顔と胴体に焦げた跡があり、一人は首が、もう一人は足が、有り得ない方向に曲がったまま、既に事切れていた。

「クリスマスイブだというのに、家族には誰が伝えるんだろうな……」

南部は、二人を抱え起こして端に寄せ、シャフトの壁に凭れさせた。天井の救出口はボルトで固定されていた。鷲尾から借りっぱなしになっていたブライヤーを開いて、ボルトを緩めた。

「アンダーソン、エレベーターのケージにたどり着いた。レーザーは破壊したから、もう撃たれる事はない。レスキュー隊を寄越してくれ」

——わかった。伝えよう。

南部は、救出口のパネルを外し、エレベーターの中を覗きこんだ。階数を示すボタンの上に、監視カメラが取り付けられていた。扉は閉まっている。

「エレベーターにあるのは監視カメラだけか？」

——いいえ、床に重量センサーがあります、南部博士。

ゴードンが応答してきた。

南部は、ケージの端のスイッチを押した。予想通り扉が動いた。

「とりあえず中に降りよう」

南部は、エレベーターの床に飛び降りた。スーツのおかげで、足にも腰にも大して衝撃は感じない。

「セキュリティ目的で床に重量センサーを入れたのだとしたら、監視カメラの情報に比べて異常に重い何かを持ち込まれないか調べるためと、今通つてきたシャフトへの出入りの有無をチェックするためだろう。侵入者が外へ逃げ出した場合はシャフト内のレーザーで狙撃されるが、そいつは今潰したばかりだ。侵入者が外から入った場合は……多分この先のセキュリティシステムが出迎えてくれるな」

——今でセンサーに引つ掛かったはずですよ。いいんですか？

「いや、これでいいんだ。退路を確保しなければならんからな。トリッキーな方法でセキュリティを回避してそのまま残しておいたら、戻ってきた時に犠牲者が出るだろう。それくらいなら、私を不審者と見做して排除しにきてくれた方がいい」

—— 闇になるつもりか、南部君。

「そんなところだ。で、時間がどれくらいあるか教えてくれ。P4焼却のタイムリミットが、おそらく脱出のリミットだろう」

—— 爆発が起きたのは、午後三時半ちょうどでした。何もせずにこのまま放置すれば、六時間後、つまり今日の夜九時半に焼却装置が作動します。

「それなら問題は無いだろう。時間は十分ある」

—— 何もしなかった場合の話です、南部博士。もし、誰かが強引に脱出しようとした場合は、それを食い止めるために、五分以内に焼却が始まります。外から誰かが入った場合もです。

「P4の破壊を回避するには、六時間以内に汚染除去作業を終わらせたことをシステムに納得させる、ということだな。判定条件を調べておいてくれ」

● PHASE 5 R&Dセンター・地下十階

南部は、廊下を歩き始めた。誰もいないフロアは静まり返っている。

—— どうするんだ？

「電気系統の配線用ダクトへ向かう。機械室の鍵を開ければ入れるはずだ。そのあと何処へ向かうべきか

教えて欲しい。そちらの監視カメラでわかる範囲でいい」

—— 十階から十二階までは、カメラはすべて無事で、今のところ人の姿はありません。十三階から十六階までの、機械室から端までの区画の監視カメラは作動していないので、様子がわかりません。十七階と十八階のカメラは無事で、誰もいないようです。十九階は機械室と両隣の部屋のカメラが動いていません。二十階は、P4内部のカメラが一部破損していますが、出入り口と通路部分は見えています。廊下のカメラは生きています。

「つまり、カメラが動いていない場所に誰か居るかもしれない、ということだな」

次の一步を踏み出した瞬間、警報音が鳴った。

『シンニュウシャデス』

繰り返される合成音声が廊下に響き渡った。南部は足を止めた。

バシュッと音がして、天井に埋め込まれたプラスチックカバーがはじけ飛んだ、南部は、床に転がり、移動しながらバッグの中を探った。小型の酸素ボンベを取り出し、口に咥えた。そのまま奥へ走り抜ける。

—— 南部、どうした！

——催涙ガスと催眠ガスでしょう。IDカードの信号を見張っていて、許可を持たない人間が通れば自動的に作動します。

ゴードンが説明した。

廊下を走りながら南部は、逃げ込めそうな部屋を探して、実験室のドアを引っ張った。それらしい部屋は全て施錠されていた。機械室の隣の物置の扉の鍵は開いていた。南部は中に走り込んで扉を閉めた。酸素ボンベを離して深呼吸した。目を閉じると涙が流れ出た。

「今、機械室の隣だ。このフロアのトラップはワンショットなのか？」

——一度動作すると、天井にセットされたガスカートリッジを使い切ってしまうので、事が終わったら交換になります。

「それじゃあ、多分、今ので終わりだろう。レスキュー隊にこのフロアの換気を頼んでくれ」

——連中は酸欠状態での救助もやっているからな。装備は持つているはずだ。直ぐに手配させよう。おい、どうした？

「ちよつと目にしてみてな……もう大丈夫だ」

南部は、涙の滲んだ目で部屋を見渡した。掃除用具や段ボールなどが置かれている。南部は、柵に転がっ

ていた布製のガムテープを持ち、そつとドアを開けた。まだ刺激臭が漂っていたが、短時間なら問題なさそうだった。借りてきたキーで機械室の扉を開け、中に入った。扉を閉めようとした南部は、その手を止めて、扉を見つめた。もう一度扉を開け、扉の枠を眺めた。ノブの部分以外の上下に、穴が開いていた。南部はガムテープを重ね貼りして、穴を塞いだ。さらに、ドアノブ部分の穴もガムテープで塞いでから、機械室の隅の監視カメラに向かつて手を上げた。

——南部君、何をやっているんだ？

「受座らしい穴を全部塞いでみた。うかつにドアを閉めたままで、中で何かやつたら、閉じ込められそうない気がしたのでな」

配線用ダクトの入り口は、金網でふさがれていた。二、三回蹴飛ばすと簡単に開いた。南部は、懐中電灯を取り出し、中を照らした。

「今、ダクトまでたどり着いた。これから下へ降りる」

● PHASE 6 R&Dセンター・配線ダクト

南部は上半身を乗り出してダクトの下を見た。一人が通れる丸い通路が遙か下まで伸びていて、梯子が取り付けられている。下から吹いてくる風が妙に

熱く、下の方が煙っている。

南部は梯子に取り付いた。

「許可無く入るとガスを出すと云ってたな。センサーの方式は？」

——炭酸ガスセンサーです、南部博士。

「出てくる方も炭酸ガスじゃなかったか？ セキュリティというよりは、中に入った人間を問答無用で殺すことを狙っているように見えるが」

——保守点検中に内部に潜り込んだ実験動物を駆除する方が主な目的です。以前、中に入った鼠にケールを齧られて停電を引き起こしたことがあります。……それを後から侵入者対策に転用したんです。

「センサーの位置は？」

——階段を降りているとき、背中側の壁側に箱があるはずで。

——南部は後ろを振り向いた。四センチメートル四方程度の四角い箱が壁に取り付けられていた。箱から出たリード線は、筒状のダクトに開けられた小さな穴に入っていた。

——南部は、左腕に通したガムテープをちぎって、センサーの空気取り入れ部分にぴったりと貼り付けた。

——南部、レスキュー隊が地下十階の換気を始めた。パイプを伸ばして、ダクトに酸素を送り込むこともで

きると言っている。

「待て、中の温度がかなり高い。近くのフロアはおそらく火事だ。ここから酸素を供給したらもつと炎上しかねない。万一に備えて、準備だけしておいてほしい」

——内部はどんな状況だ？

「そうだな。一晩も居れば、立派な燻製になれるだろう」

——ガスは大丈夫か。

「カナリアを連れて入りたいところだが、とりあえず大丈夫だ。センサーを潰しながら十三階まで降りる」

——潰すって、何をしているんだ？

「失敬したガムテープを貼り付けているだけだ。炭酸ガス濃度が変わってもバレないように。センサーの信号線を切ろうかと思ったが、切ったことを検知されるとまたややこしくなりそうだからやめにした」

——疑い過ぎじゃないのか？

「だいたいんだが」

● PHASE 7 R&Dセンター・地下十三、十四階

——地下十三階の機械室の構造は、入ってきた地下十階とほとんど変わらなかった。南部は、機械室から廊下

に出た。監視カメラの映像が出なくなっている、エレベーターと反対側の端に向かって、廊下が崩落し、露出した梁の一部が斜めになつて階下の瓦礫に突き刺さっていた。

「誰かいるかー!」

南部は叫んだ。返事はない。

崩落は5メートル以上に渡つておきていた。南部は助走し、斜めになつた梁目がけて飛んだ。梁を蹴飛ばし、もう一度ジャンプして反対側の床に立った。実験室の扉はロックされていた。ドアをノックしたが返事はない。

「十三階には誰もいない。十四階に降りてみる」

瓦礫の隙間から十四階目がけて南部は飛び降りた。倒れている戸柵の上に着地した瞬間、ぐらりと傾いた。反射的に南部は飛び下がった。

——南部君、どうした?

「どうやらここが、爆発の中心らしい。かなり傷んでいる。下手に歩くと、そのまま床を踏み抜きそうだ。しかしここは一体何の部屋だ? 一体何があつたんだ?」

壁は崩れ、かなりの部分が下の階に落下していた。薬品棚や工具類を置いていた台がひっくり返つて部屋の端まで飛ばされ、梁が断ち切られて外壁から土砂

が入り込んだ中に埋もれていた。土砂は、実験室の半ばを埋めただけでは済まず、下の十五階にも流れ込んでいた。ドラフトも吹き飛び、フィルターが散らばつて、扉がめくれ上がっている。ディスプレイを備えた分析装置らしきものが床に転がり、割れたブラウン管が虚ろな空間を晒していた。南部は、捻れて曲がつたシャーシを目に留めた。付着物に見覚えがあつた。指でそつと掬い取る。

「そつちに誰が居る?」

——私と、警備主任。他には警備員やレスキューの隊長や隊員が何人か詰めている。何だ?

「あまり大勢に訊かれたくない話なんだが、受信機を持つて部屋の外に出られるか?」

——待て、イヤホーンをつける……、よし、いいぞ。

「アンダーソン、どうやらこれは事故じゃない」

——どういう事だ?

「爆発物の痕跡を見つけた。分析してみないと正確なことは言えないが、多分C4だ」

——何だつて? しかしそんなに簡単に持ち込めるものなのか……。

「このセキュリティは厳しいが、空港並の荷物チェックやボディチェックをしているわけではないだろう」

「確かに、情報の漏洩には神経を尖らせているが、破壊工作に対するチェックは甘かったかもしれない。しかし、テロなら予告か犯行声明でも出ているはずだ。ISOに対するこのレベルの重大案件は、長官にも私の所にも情報が来るはずだが、何も聞いていない。」

「不満を抱いた職員が居たということはないのか？」
 「軍事機密も扱うことがあるんだ。身辺調査は十分にしている。」

「ISOへの抗議なら、こんな地下十四階を狙うよりも、本部ビルを狙う方がよっぽど楽だしアピールもできるだろう。わざわざここを狙ったのには、何か理由があるはずだ。出入りしている人間をもう一度全員調べ直した方がいいんじゃないか？ 物理的にC4を持ち込めるのは、ここに入れる人物だけだ」

「わかった。関係者全員の居場所を突き止めて、必要があれば拘束するように手配しよう。」

南部は、もう一度ダクトに入るために、地下十四階の機械室に向かおうとして、足を止めた。防火扉でふさがれた実験室から猛烈な熱輻射を感じた。扉の隙間が赤く輝いている。内部が相当高温だとわかった。扉が保たなければ、近くに居た場合は確実に炎の直撃をうける。南部は、慌てて引き返した。

崩落している隙間を狙って飛び上がり、十三階のフロアへとよじ登った。出てきた機械室にもう一度入り、ダクトに潜り込んだ。

● PHASE 8 R&Dセンター 地下十五階

監視カメラから姿が確認できた。南部、その地下十五階は原子力工学の実験室への入り口だ。

ダクトから這い出し、廊下に出た南部に、アンダーソンからの通信が届いた。

エレベーターの脇に詰め所があり、その向こうに廊下を挟んで二箇所、銀行の金庫のような分厚い扉が作り付けられている。

「ISOがウラン工場を建設するための基礎実験をしている。プルトニウムからウランを製造する。」

「じゃあ、あれがプルトニウム貯蔵庫か」

「純度の高いプルトニウム二三九を保管している。」

南部は、貯蔵庫の前へと走った。特に異常はない。「貯蔵量は？」

「監視カメラで見えている三つの保管庫だけで、十キログラム以上ある。精密に作れば、核爆弾を最低一発は作れる量だ。」

「それだけあるのなら、破壊工作の目的は、普通はプ

ルトニウムだろうと思うんだが……」

——崩落した反対側の一角にある貯蔵庫はわからんが、見えている貯蔵庫に近寄った者は居ない。

「他にもあるのか？」

——この階の両端と、一つ置いた十七階の両端に保管庫がある。挟まれた十六階は中央に設置されている。

南部は振り返った。建物の反対側の端に通じる廊下は、上の階から流れ込んだ土砂で埋まっていた。仮に、監視カメラが効かない隙を狙って反対側のブルトニウム貯蔵庫を狙ったとしても、これでは持ち出すことは不可能である。

「狙いは別なのか……」

この階から、土砂で埋まった反対側へは行けない。南部は、廊下を駆け、ダクトに取り付いて、もう一階下へと向かった。

● PHASE 9 R&Dセンター・地下十六階

地下十六階は、上から落ちた天井が斜めに通路を塞いでいた。奥へつながる通路には隔壁と扉があったが、隔壁が折れて歪み、扉の部分も曲がっていた。

南部は、転がっていたコンクリート片を手に、ドアを叩いた。規則的に叩くと、反対側から叩き返してき

た。

「誰か居るのか！」

『九人です。ドアを開けられなくて……』

南部は、渾身の力を込めてドアを引っ張った。スーッと何割増しかになっている筈の力でも、びくともしなかった。

「アンダーソン、逃げ遅れた人を見つけた。しかし、隔壁が壊れていて開けられない」

「レスキュー隊を向かわせようか？」

「待つて下さい。大勢で行ったら、侵入検知システムの餌食になります。」

ゴードンの慌てた声が聞こえた。

「そんなことだろうと思ったよ。十四階の火事の場合がかなり悪い。急がないと、脱出するまでに燃え広がって退路を断たれるかもしれない。レスキュー隊には、ロープと担架をダクトに降ろす準備をするように言ってくれ。これから扉を爆破する」

「爆破って、どうするんだ？」

「ここは実験室だよ、アンダーソン」

南部は、廊下を走った。案の定警報が鳴った。通路に、ガスの発射口もレーザーも銃口が現れそうな蓋も無いことを瞬時に確認し、スーツで補完された筋力まかせに駆け抜け、薬品倉庫に向かった。借りてきた鍵

で倉庫を開け、中に飛び込んだ。

「ここでは主に何をやってる？」

——ウラン製造に関わる全てだ。臨界の制御から、プラントに使う材料の耐久性の確認まで。コンクリートから金属まで、計画中の工場で使いそうなものは全部だ。

「さすがに詳しいな」

——は、こんな時にお世辞か？ 私だつて書類の整理だけしているわけじゃないぞ。

アンダーソンは、次世代のエネルギーの探索の指揮をとっていた。南部が提案したマントルエネルギー利用も含めて、新しいエネルギー利用の提案は全てアンダーソンが目を通すことになっていた。

「金属材料の研究か……。さて、何があつたかな？」

南部は呟きながら薬品棚を順番に見ていった。

——TNTなんか置いてはおらんぞ、南部君。

「それじゃない……。ああ、あつた、これだ」

南部は、2、4、6トリニトロフェノールの瓶を引つ張り出した。金属を溶かして顕微鏡観察をするのに使われる試薬だが、極めて不安定で、衝撃や摩擦を与えれば簡単に爆発する。その爆発の威力はニトログリセリンよりも強く、爆薬として兵器に使われていたこともある。

セキュリティシステムが動き出した以上、外に出たら何らかの攻撃があるはずである。瓶を片手に扉をあけて、南部は廊下をそつと窺った。

端の部屋のシャッターが開いて、筒状の胴体に半球状の容器をかぶつたロボットがぞろぞろと現れた。

「アンダーソン、変なものが出てきた。これは一体何だ？ そつちのカメラで見えるか？」

——侵入者を自動的に制圧する装置です。

——ゴードンが代わりに答えた。

「何をするんだ？」

——不正に侵入した人、つまり適正なIDカードを持たない人を見つけると、自動的に銃で狙撃します。近付けばスタンガンが作動します。ターゲットの認識のために赤外線カメラを備えています。半球状の部分に三つです。

南部は、ドアの間からロボットを観察した。半球状の部分に三個所、赤外線カメラのレンズらしきものが見えた。上の部分はモーターで回転しており、レンズから逃れるのは難しそうだった。方向転換はかなり早い、スピードはそれほど無い。複数の車輪をうまく組み合わせて動いているらしく、動きはなめらかだった。

「銃で狙われる前にひっくり返してやったらどうな

る？ 動きはそんなに敏捷ではないぞ。自動的に起き上がっては来ないんじゃないか？」

「傾きを検知するセンサーを持っているので、外から力を加えて倒せば爆発します。それに、マグナムでもあればともかく、小口径の拳銃では壊せません。」

南部は、眉間に皺を寄せて溜息をついた。

「これもデーモン博士の作なのか？」

「そうです。十台単位で、国連軍の施設にも配備されています。特殊部隊を相手に模擬防衛戦をやった時は、結局、火力のある武器で遠距離射撃して破壊するしか対処する方法がなかったそうです。ビルの狭い通路でとれる方法じゃないですから、条件さえ限られれば、かなり手強いとみるしかありません。」

「特殊部隊が来たがらなかったのはこれが理由か」

「私も今そう思ったよ。どうするんだ、南部君。」

「多分危険なのは一瞬だけだ。何とかやってみよう」

南部は、拳銃の残り弾数を確認した。残り二発。最初を外してももう一度チャンスはあるが、ロボットに追われている状態で二発目を撃つ時間が果たしてあるのか……。ロボットの動きを予想し、自分が動くべきタイミングを頭の中で思い描いた。いくつかのパターンを考えた後、南部は廊下に飛び出した。衝撃を与えれば南部自身が吹き飛ばす試薬を抱えて、隔壁に向

かって全力疾走した。冷や汗が滲む。落ちている天井の先に手を伸ばし、南部はドアの前に試薬瓶を置いた。

「全員、ドアの前から退避して物陰に隠れる！ できればどこかの部屋に入れ！ わかったな！」

言うなり、南部は隔壁と反対方向に走った。近付いてくるロボットを、廊下の壁を蹴ってジグザグに飛び越えた。着地と同時にベルトから拳銃を引き抜き、ドアの前に置いたトリニトロフェノールの試薬瓶を狙い撃ちにした。

轟音ともに爆発がおき、壁の一部が壊れ、ドアが破れた。南部は再びロボットを飛び越え、穴に向かって走り、開いた穴から中に転がり込んだ。揃いの作業着姿の研究員達の視線が集中した。ヘルメットにボディラインの見えるスーツにブーツにマント、しかも黒一色では、どう見てもテレビに出て来る悪役の出で立ちではない。

「あー、その、恰好はともかく、私は怪しい者じゃない。助けに来たんだ。動けない者は居るか？」

「足を怪我した人が一人……」

据っていた年配の男性を介抱していた女性研究員が叫んだ。

「解った。手を貸してやってくれ。エレベーターは地

下十階で止まっているから使えない。一人ずつ機械室へ行くんだ。配線管理用のダクトに出られる。レスキュー隊が来ているから、指示に従って脱出してくれ。残っているのはここに居る人で全部か？」

「上のフロアに居た人達も、あそこの穴からこちらに……」

別の研究員が、崩れた天井に開いた穴を指さした。

「そうか、それは良かった。土砂に塞がれていて、この上には入れなかつたんだ」

「何で、救助隊が来なくて、あなた一人なんだ？」

「いろいろあつてな。時間がない。詳しい説明は、上に来ているアンダーソン副長官に訊いてくれ。私はこれから、下のバイオラボまで行つて、スタンレー博士を探さなければならぬ。セキュリティシステムが作動しているが、全員、IDは持つてるな？」

南部は、一同の顔を見渡し、頷いたのを確認した。「誘導してやりたいが、私はセキュリティロボットに狙われているから、巻き添えになるかもしれない。皆さんとはできるだけ離れるから、各自で機械室まで行つてほしい」

南部は、ロボットの狙いを引きつけるために、再び廊下を駆けた。

● PHASE 10 | SO・R&Dセンター・一階

「南部がやつたぞ！」

アンダーソンが叫んだ。警備室から拍手が沸き起こった。監視カメラの映像を映し出したモニターの中で、救助された研究員達が次々に機械室へと向かっていく。

「アンダーソン副長官、職員の居場所の照合が終わりました。先に病院に運ばれた人も含めて、全て所在を把握しています。ただ、一昨日から無断欠勤して行方わからない職員が三人居ます」

警備員が駆け込んできた。

「すぐに警察に連絡して手配しろ。身柄を押さえるんだ。IDと顔写真を提供してやれ」

アンダーソンは再びモニターを見つめた。

監視カメラの映像の中で、南部は逃げ回っていた。飛び、壁を蹴つて宙を舞い、着地してダッシュ。

「上手いものだ。それもその特殊スーツの機能か？」

「そうだ。これがあるから何とかなってる。」

言った瞬間にロボットの一つが発砲した。筐体から白煙が上がる。アンダーソンは思わず一瞬目を閉じた。

「見ちゃいられんな。そいつは特殊部隊と互角以上に

渡り合うロボットだ。そうそういつまでも逃げ切れるものじゃないぞ。大丈夫か？」

「今、対策を考えている。」

南部は、機械室の向かいにある倉庫に駆け込んだ。

「おい、どうしたんだ？」

「いい物を見つけたぞ。」

再び姿を見せた南部は、取っ手のついた丸い缶に刷毛を握っていた。一番近いロボットのカメラを狙って刷毛を突き出した。

「何をやってる？」

「ロボットのカメラを塗りつぶす。赤外線検知なら、塗料越しでは何も見えないはずだ。……くつ、最初はきついな……。」

南部は、部屋から出て手の届く範囲に来ているロボットの赤外線カメラのレンズにペンキを塗りつけ、慌てて部屋の扉を閉めるという作業を繰り返している。そのコミカルな動きに、モニターを見つめる警備員から笑い声が上がった。

「ありゃあ、一体何の罰ゲームだ？」

「馬鹿、南部は命がけだぞ！」

アンダーソンは怒鳴った。

カメラの数が減れば減るほど、南部の姿を認識するのが遅れるし、難しくなる。やがて、いちいち隠れな

くても、残りのレンズにペンキを塗る余裕ができた。レンズを全部塗りつぶされた十台のロボットは、不審者は居なくなつたと判断して、勝手に格納庫に戻って行った。

「どうやらうまく行った。こいつらを止めるために必要なのは武器じゃない。特殊部隊の連中は、フル装備で押そうとしたんだろう。手持ちのガムテープでカメラを塞いでやってもよかつたんだが、その距離まで近付くと電気ショックを喰らいそうだしな。」

「南部博士、ISOを辞めてもペンキ職人で食べて行けそうですね。」

ゴードンが笑いを堪えていた。

「冗談じゃない。」

「それはともかく、南部博士、さっきの対応は正解です。もし、ダクト内の炭酸ガスセンサーからの信号が跡絶えたら、機械室の扉がロックされて、外には出られないようになってました。仕様書をひっくり返してやつと見つけました。」

「了解。次は、十九階の機械室周りだな。」

南部の姿が再び消えた。

「こりゃ、デーモン博士に恨まれるぞ、南部君は……。」

アンダーソンは溜息をついた。

「アンダーソン副長官、お電話です。」

部屋の隅で別の職員が手を上げた。

「こっちに回してくれ」

電話機のLEDが点灯するのを見て、アンダーソンは受話器を取った。

「アンダーソンだ」

電話は長官からだった。アンダーソンはこれまでの状況を説明した。

『よくやつてくれていているようだ。だが、万が一の時は、R&Dセンターを土に帰さねばならん。念のため、国連軍には緊急出動を要請した』

「どういう事ですか」

「今のままで事態が沈静化すればいいが、そうでなかった場合には……」

「一体何が問題なのですか」

「重要機密だが、君には教えておく。この状況になった以上、知る必要があるだろう……。誰に伝えるかは、アンダーソン、君に任せよう。私も大至急そちらに戻る」

● PHASE 11 R&Dセンター・地下十九階

地下十九階の機械室と配線ダクトを仕切る金網は失われていた。機械室の機材は床から引きはがされ、

あるものは倒れ、あるものは傾いて別のラックにぶつかっていた。配線もあちこちが切れかけているらしく、パネルの半分をもぎ取られた配電盤から不規則に火花が上がっていた。

南部は、梯子から機械室につながる点検穴に飛び込んだ。

「こちら南部。P4フロアの爆発は、上に抜けたらしい。地下十九階の機械室の床を吹き飛ばしている。この下には何がある？」

「P4に入るための装備をストックしている。使い捨ての手袋や白衣、保護眼鏡といったものだ。内部を陽圧にできる防護服も、予備はそこで管理している。」

「つまり、P4に入らなくても爆薬をセットできるということだな」

P4に入る時は専用の防護服を着用し、実験器具の持ち込みは人とは別の場所から行っている。P4から出る時も同じで、人も器具も滅菌される。滅菌してまで持ち出す器具はどうしてもそうしなければならぬものだけで、大抵の器具は使い捨てが基本で、使い終わったら速やかに焼却処分される。着替えなければならぬため、余分なものを持ち込むのは難しいし、器具に隠して持ち込むとなると、人目につく可能

性が高い。

「配線ダクトはこの階までだ。下へ降りる方法はあるか？」

——実験室に入れ、南部。この凶面によると、実験室内に下へ降りる階段と、実験器具を運ぶためのエレベーターがある。おそらく、危険ではない微生物の実験と、P4の実験の準備室として使われているんだろう。

廊下に面した側に入り口が二つあった。自動ドアらしい入り口は二つとも開いていた。南部は入り口に向かった。ピーツという甲高い警報音が鳴った。南部は足を止めた。なびいたマンントの端が、シュツという音とともに煙を上げた。

廊下の天井と両脇の壁が鏡面になっていた。天井から四個所、レーザー光が伸びていた。鏡で反射を繰り返し、網のようなパスを作っていることが、時々燃えて光る小さな埃の様子からわかった。人がぐぐり抜けられる隙間はない。南部は拳銃を引き抜いて、左上のレーザーを撃った。残り三つ。人が通れる余裕は無い。

「……だろうな。私が作るとしても、最後の一つになっても役目を果たすように設置するさ」

南部は溜息をついた。

——南部、急に止まったりしてどうしたんだ？

「レーザーの壁に行く手を阻まれた。入り口を開けておけば、侵入者は大急ぎで入ろうとするだろう。どこでチェックされるか警戒しながらゆつくり歩いていたら良かったが、走っていたら止まるのが間に合わなくて間違い無く灼かれていた。まるで、エサの前に罠を仕掛けるようなやり方だな」

南部は目をこらした。光の加減で、レーザー光がどこを通っているか、はつきり見えない。何か無いかと南部は辺りを見回した。トイレの表示があった。南部はトイレに駆け込み、棚の上に置いてあったトイレトペーパーを持って引き返した。レーザーの所まで戻り、鷲尾に借りたプライヤーの柄に仕込まれたナイフを取り出し、トイレトペーパーを細切れにして、床に置いた。

「アンダーソン、ライターは無傷では返せないかもしれない」

南部は、アンダーソンから借りてきたライターでトイレトペーパーの切れ端に火をつけた。炎と煙が上がった。

——今度は放火か？ 別の警報が鳴りそうだな。
「ちよつと見やすくしてみた。スプリンクラーで水浴びする前に終わらせる」

煙を吸って咳き込みながら、南部はレーザーを見た。煙の微粒子による散乱で、赤い光が浮かび上がった。レーザー光の向きを目で追って、南部は、アンダーソンのライターを差し込んだ。鏡面仕上げのオイルライターの表面で反射された光が、壁の塗料に黒い焦げ跡を作った。ライターの角度をゆっくり角度を変えて、レーザーに反射光を戻した。パシッと音がして、光の放射が止まった。一度コツを挿んでしまえば、残る二つを潰すのは簡単だった。トイレットペーパーの切れ端を踏んで火を消し、南部は実験室へと足を踏み入れた。

「一通りの物は揃ってるな……」

クリーンベンチに培養容器、滅菌相違に遠心分離機、蒸留水の製造装置、流し台などが備え付けられていた。部屋の真ん中の実験台には、シーケンサーやプライマーの合成装置などが整然と並んでいた。どこにもありそうな、標準的な遺伝子工学の実験室だった。部屋の一番奥の壁際に、階下に通じる階段と、機材専用の小さなエレベーターの扉が見えた。

「あそこか」

南部は奥へ進もうとした。突然、入り口の上にある赤色のランプが点滅してブザーが鳴った。南部は振り向いた。目の前で自動扉が両方とも閉まった。

● PHASE 12 | ISO・R&Dセンター・一階

建物の外でジェットエンジンの轟音が響いた。

「何事だ？」

「ハリヤーが三機、強行着陸してきます」

アンダーソンの問いに、警備員が答えた。エンジン音が小さくなつて間もなく、パイロットスーツの男が警備室に入ってきた。

「この責任者は誰だ？」

「私だ。君は？ 確か……」

「空軍の鷲尾健太郎少佐だ。スクランブルがかかるのはいつものことだとしても、攻撃目標がアメガポリスのど真ん中にあるISOのR&Dセンターだというのは一体どういうわけなのか、事情を知りたくてな」

「最近の兵士は、命令の理由をいちいち訊くのか？」

「いいや。出ているのは上空での待機命令だから、ここに来た時点で既に俺は命令違反だ。だが、知らない間にクーデターに荷担させられるよりはマシだと思つてな。ISOが誇る先端研究施設を国連軍に壊させるなんざ、正気の沙汰じゃない」

「空軍の方が先だったか……」

「どういう意味だ？」

「残念ながら命令は本物だし、クーデターでもない。」

陸軍にも出動が命じられた。攻撃命令があつた場合には排気ダクト経由で地下百メートルにミサイルを撃ち込むことになっている」

鷲尾は、モニター画面に目をやった。特徴のある黒いスーツ姿が、部屋の扉を調べていた。

「あれは南部か……あそこで一体何してるんだ？」

アンダーソンは、これまでの状況を簡単に説明した。

「一人で行かせたのか！」

鷲尾は、アンダーソンにつかみかかった。

「南部君が自分から行くと言つたのだ。実際、こここのセキュリティをかいぐぐつて要救助者までたどり着くのは、他の者には無理だ。救助する人間よりも犠牲者の数の方が多くなりかねん」

「何だつてそんな厄介なシステムを……」

「テロの騒ぎに乗じて機密が盗まれたケースがあつたからな。それを防ぐ為だ」

「時間はどれくらいある？」

アンダーソンは、壁に掛けられたデジタル時計を見た。

「このまま何もしなければ、P4の焼却処理が始まるのが一時間半後だ」

「アンダーソン副長官、警察から連絡です」

「つないでくれ」

アンダーソンは、ゴードンに目配せし、スピーカーとマイクがつながっている電話機のボタンを押した。

「ISOのアンダーソンだ」

「アメガポリス警察です。手配されていたISO職員を三人とも発見しました」

「どこでだ？」

「港に沈んでいた車の中からです。既に死亡しています」

「事故か？」

「銃創があるので、他殺の可能性が高いと思われます。それから、同乗者があと一人……」

「誰だ？」

「身元を証明するものを持っていないためはつきりした事は言えませんが、持ち物に刻印された名前と、これまで報道された写真からすると……スタンレー博士ではないかと」

「何だつて！」

アンダーソンは、ゴードンと顔を見合わせた。情報が本当なら、救助に向かった南部がテロリストと出くわすことになる。

「詳しいことがわかつたら逐一報告してくれ」

電話を切つて通信機に向かう。

「南部、聞こえるか。警察から連絡があった。スタンレー博士らしい死体が見つかった。ISOの職員と一緒にだ。今、地下に居るのは偽者のスタンレー博士かもしれない。救助をやめてすぐに戻ってこい」

—— 確定したのか？

—— 南部は冷静だった。

「いや、だが……」

—— その情報が間違っていたら、ここまで来てスタンレー博士を見殺しにすることになる。人道的にそれはできないし、人類にとっても大きな損失だ。非難だつて受けそうだな。

「相手がテロリストだったら、何をするかわからんし、君の身が危険だ。それに、三人は中に居るんだぞ。今のP4は普通の方法では出入りできない。もし助けられなかったとしても、誰も、君を非難したりはしない。君はもう十分にやっただろう。世間の非難を受けるとしても、それはISOの長官や私の役目だ。君じゃない」

—— しばしの沈黙を破つたのは南部だった。

—— いずれにしても、下へは降りてみよう。ただ、その前に出る方法を考えないと。

「どうしたんだ？」

—— 実験室に閉じ込められた。ドアも壁も、人の力で

は壊せない。

「何でことだ。そこに居てP4の焼却が始まったら只是すまんぞ。削岩機と爆薬を持たせて、レスキュー隊を向かわせよう」

—— アンダーソン、無駄なことは止めてくれ。私一人のために、大勢の命を危険にさらす必要はない。

「おい南部、クリスマスイブの夜に、お前がローストされてどうするんだ！ 焼くのは七面鳥だけでたくさんだぞ！」

—— 鷲尾は、アンダーソンのマイクに向かって横から怒鳴った。

—— 鷲尾か、どうした？

「このセンターを破壊せよとの命令が出ている。何かの間違いかと思つて責任者を問い詰めたんだが、えらくややこしいことになってるな」

—— 爆撃による破壊に興味があればいいんだがな。

「他人事みたいに言うな！ そこに居たら生き埋めだぞ」

—— アンダーソン、P4の監視カメラは動いているか？

「ああ」

—— 監視を続けてくれ。それから、録画したものがあつたら大至急チェックしてほしい。今下に居るの

がテロリストだとしたら、彼らが一体何をしているのかが気になる。

● PHASE 13 R&Dセンター・地下十九、二十階

南部は、P4のある地下二十階に降りた。P4入り口には、掌紋認証の装置とカードリーダーが備え付けられていた。ここから中に入り、内部で専用の防護服に着替えることになる。前室が広いため、中で何が行われているかを窺い知ることはできなかった。P4の区画の脇を、奥に続く廊下が延びていた。消耗品の倉庫が吹き飛んで、焼け焦げた消耗品が廊下に散乱していた。階段を下りた直ぐ脇の部屋に、作業台やメモ用紙と保安用品が置かれていた。ストックされた備品を上からの柵から取るための踏み台や、ロープ、懐中電灯やヘルメットといった、どこにでもありそうなものばかりで、壁を壊すのに役立ちそうな道具は見当たらなかった。

再び地下十九階の実験室を見て回った。それなりに重量のありそうな実験器具があったが、南部が抱えて扉や壁にぶつけたところで、どうにかなると思えなかった。

「壁か扉を壊せるだけのエネルギーを稼げるものとい

うと……」

南部は、遠心分離器の前で立ち止まった。最高回転速度七〇〇〇rpmの超遠心器だった。電源ボタンを押すと、ランプが点き、ファンが回り始めた。「電源が生きてるつてのはありがたい」

——南部君、何をしているんだ？

「運任せだが、出られるかもしれない方法を思いついた。事前に計算できないのが性に合わんのだが。うまくいくよう祈ってくれ」

南部は、洗瓶の水をテストチューブ一杯まで入れて蓋をし、遠心器の片側にだけ5本まとめてセットした。蓋を閉め、通常の手順通りに内部を排気した。回転数を最高に上げてから、遠心器をスタートさせ、そのまま階下へと駆け降りた。

けたたましい機械音の後、轟音と振動が来た。南部は、ゆつくりと階段を上った。シーケンサーのディスプレイを粉々にし、試葉柵を崩壊させて、超遠心機が壁をぶち抜いて廊下に飛び出し、向かいの壁にめり込んでいた。

——何をやったんだ？ 爆発物か？ 装置がすっ飛んで行ったぞ！

「とりあえず出口は確保できた。構造壁でなかったから大穴が開いている」

南部は、柵の残骸を引つ張つて、邪魔にならないところに放り投げた。壁の穴を軽く蹴り、コンクリートの破片を落とし、穴から取り除いた。廊下は、埃と破片で惨憺たる有様だった。

「昔、大学に居た時に超遠心を使った実験で事故があつてな。バランスを取るのを怠つて回した結果、一階の実験室の遠心器が三階の床をぶち抜いたのを思い出したんだ。まあ、どっちに飛ぶかわからんから頼みでしかなかったが、これしか思いつかなかつた」

南部は廊下に這い出した。

「P4の状況がどうなっているか教えてくれ」

● PHASE 14 ISO・R&Dセンター・一階

アンダーソンは、この一週間のP4の監視カメラの映像を早送りして見ていた。実験操作にも持ち込まれた機材にも、特に怪しい所はなかった。今日になつて、トランクのような箱が持ち込まれていた。

「あれは何だ？」

ゴードンがオンラインで帳簿を呼び出した。端末上に表示される。

「記録によれば、スタンレー博士の持ち物です。実験に必要なが、秘密を守るため人目に触れさせたくない

ということだったのであのままで許可しました。持ち出す時に滅菌できなければ、お返しすることはできず、焼却処分になると説明しましたが、それでも良いということだったので……」

「今、あの箱はどこにある？」

「一番大きい実験ベンチの中です」

警備室の入り口がざわついた。銀髪で長身、年配の男がコートをなびかせて入ってきた。

「長官……」

「状況は？」

アンダーソンの説明を、長官は頷きもせず聞いていた。

「その状況ならウイルスの外部への流出は無さそうだな。で、下に居るのは南部博士だけなのか」

答えようとしたアンダーソンは、P4の映像を見て叫んだ。

「無茶なことを……」

中に居た三人が、P4の出入り口を無理矢理こじ開けようとしていた。カメラの映像に強烈な光が走り、三人とも相次いで倒れた。アンダーソンは思わず目を背けた。

「爆発が発生したため、セキュリティシステムがP4への出入り口を強制ロックしています。無理に出よ

うとすれば排除されます」

「何てシステムだ……」

「これまで、事故が起きたときに現場の人間がどうかしようとしたために、病原体が拡がってしまうことが度々起きています。その教訓を活かして、現場の人間にどうにかさせないようなセキュリティシステムを作ったというのが、デーモン博士のおっしゃっていたことでした……」

ゴードンが説明した。

アンダーソンは、長官を見つめた。

「長官、たった今、内部の生存者は南部博士一人だけになりました」

——通信機越しに少しはそちらの様子も分かるが、何が起きたんだ？

「南部君か。もう救助の必要は無くなった。中の三人は、力づくで外に出ようとして、セキュリティの犠牲になった。あと一時間と少しで内部の焼却処理が始まる。大至急脱出したまえ」

——ちよつと待ってくれ。わからないな……。

「何がだ？ 考えるなら外に出るからにしろ」

——中にいた三人がテロリストだったとして、彼らは一体何をしに来たんだ？

「そんなことはどうだっていいだろう。どのみちウイ

ルスは外には持ち出せなかったし、焼却されてこの世から消滅するんだ」

——アンダーソン、スタンレー博士はなぜ呼ばれたんだ？ ここには一体何があるんだ？ 正直に教えてくれ。P4への出入は極めて厳重に管理されている。他のフロアとは桁違いだ。私でもどうやって破ろうか考えあぐねている。それを誤魔化して入り込んだ連中なら、テロリストとしても超優秀だし、周到な準備をしてきているはずだ。これで終わりとは思えないんだ。

アンダーソンは長官を見つめた。長官が頷いた。

「南部君、長官が来ている。説明をきいてくれ」

アンダーソンは、通信機につながっているマイクを長官に渡した。

「スタンレー博士を呼んだ理由は、ウイルスのワクチンを開発するためだった。そのウイルスは、生物兵器として開発されたもので、国連軍が手に入れたものだ。人間に対する毒性が極めて強く、致死率ほぼ百パーセントの出血熱を引き起こす」

——まるでエボラですね、長官。

「エボラと違うのは、接触感染だけではなく空気感染もするということだ。感染のスピードは、おそらくインフルエンザ以上だ。しかも、熱にも強いから煮沸し

た程度では死なない」

——もとの宿主は何なんです？

「全く不明だ。だが、海水に混じった場合、魚に感染することはできるようで、その魚を食べた哺乳動物に感染が確認されたという報告を受けている。ただ、人間以外の動物にはほとんど重篤な症状を引き起こさない。こんなものがわずかでも外に出たら、もう手がつけれんだろう。専門家の話では、そのウイルスはたった一個で人間一人を殺せる」

——そこまで強力過ぎると、兵器としても危なくて使えないんじゃないですか。

「そうだ。しかしワクチンを持つていけば、敵に対して圧倒的に優位に立てるだろう。使われた側はたまったものではないし、一旦広まれば戦争の相手だけではなく、全世界が危機に晒される。だから、ISOで引き取ってワクチンを作り、治療法を見つけておとした。これは、トップシークレットだから、ISO内では、私を含め、限られた人間しか知らないことだ。アンダーソン君にも言っていないくらいだ。もし、対処法が見つかる前に誰かに奪われてもしたら大変なことになる。たとえ、センターを潰してでも外に持ち出されることは防がねばならん。だから、万が一に備えて、センターの破壊の準備を軍に頼んだ。

しかし、強力なセキユリティシステムのおかげで、外部に持ち出すことはできなかったようだ」

「南部君、監視カメラを見た限り、増やしたウイルスは全てあの箱の中に入れられている」

アンダーソンが説明を引き継いだ。

——で、箱は実験ベンチの上に置かれたままなんだな？

「そうだ」

——それなら、最初から持ち出すつもりなんか無かつたんじゃいいのか？

「何だつて？」

——その箱の映像を見ていないから何ともいえないんだが、そいつは、ウイルスを生き延びさせるためのシエルターじゃないのか？ 今回のようなトラブルが起きて、これほどのウイルスを持つている状態なら、当然、P4内部は焼却処分されると誰もが思う。デーモン博士の成果発表もあったそうだしな。しかし、その温度にも、高温を保てる時間にも限度があるだろう。やり過ぎれば他のフロアまで炎上させることになる。

「その通りです、南部博士」

——ゴードン、教えてくれ。確かP4への空気の供給はフィルターを通していたはずだ。実験ベンチから

吸い出した空気もフィルターを通して処理されてい
たんじやないか。焼却処分になればどうなる？

「吸気側と排気側のフィルターは確実に燃えてしま
います」

「つまりは、がら空きということだ。焼却が終わつ
た後、箱を開ければ、生き延びたウイルスは外に出ら
れる。箱の中に爆薬が仕込まれていれば、フィルター
が無くなった換気経路を通ってウイルスが外に飛び
散るだろう。建物を壊す爆発がおきれば、部屋の中に
散らばったウイルスは土砂に混じり、いずれは雨水に
よって流されて海に到達する。建物の周囲まで崩壊
させてしまえば、雨水や地下水の浸入を止めることな
どまず無理だからな。結局ウイルスは外に出ること
になるだろう。感染が始まるのが早いか遅いかの違
いでしかないぞ。

「何てことだ……アメガポリスは全滅するぞ」

長官が呻いた。

「アメガポリスだけでは済みません。アメリカ全
体が……いや、起きるのは全世界規模の感染です。

「ISOが、世界の破滅の引き金を引くのか……ISO
の信用失墜どころの話ではないな」

アンダーソンは、ハンカチを出して汗を拭った。

「長官、まず、軍による攻撃を中止してください。

爆破しても事態を悪化させるだけで何の意味もあり
ません。

「わかった」

長官は、目の前の電話の受話器を取り、国連軍の司
令官へのホットラインを呼び出した。

「ISO長官だが、攻撃を中止してくれ。事情が変
わった……そうだ、中止だ」

受話器を置いた長官の目は、中空をさまよつてい
た。

「それで、何か手はあるのか？」

● PHASE 15 R&Dセンター・地下二十階

「南部君、P4には入れそうか？」

アンダーソンが通信してきたとき、南部は、P4入
り口の前で佇んで、階段脇の部屋に置かれていた簡易
マニュアルを読んでいた。

「とても無理だ。認証データを書き換えるといった裏
技が使えるかと考えたが、非常事態だから、そういつ
た通常の手続は一切受け付けなくなっている。ばら
まかれる前にウイルスを殺すしかないんだが……」

南部は廊下を歩き出した。

「モニターでこつちが見えるか？ 問題の箱は今どこ

にあるんだ？」

——実験ベンチは廊下側の壁にくつつけた配置になつてゐる。入り口から測つて、十メートルだ。あと三歩進め。そこだ。その壁の向こうに、箱が置かれてゐる。壁の厚みと実験ベンチのサイズを考えると、廊下の壁から箱までは一メートルもない。

「……くそっ！」

南部は壁に拳を叩きつけた。直線距離では手を伸ばせば届く距離なのに、壁に阻まれて何一つできない。壁を壊す道具もないし、仮に壁を壊したとしても、封じ込めが破壊されたと判断されて、即座に内部の焼却が始まる。

「私は魔術師でも超能力者でもない、ただの科学者だ。壁を抜けるなんて出来るか！」

静かな廊下に、南部の叫び声が響いた。自分の叫び声を聞いた南部は、目を見開いて固まつた。

——南部君……。

アンダーソンの沈痛な声が通信機から流れた。しかし南部はそれを聞いていなかった。代わりにその場で大笑いを始めた。

「あはははは、何も自分で壁抜けしなくたっていいじゃないか……はははは」

——南部君、何を言い出すんだ。追い詰められておか

しくなったのか、おい！

「私は正気だ、アンダーソン。心配するな。方法を思いついた。プルトニウム保管庫の鍵を開ける方法を教えてくれ。今から地下十五階に向かう」

● PHASE 16 R & Dセンター 地下十五階

配線用ダクトを来た時と逆に辿つて、南部は地下十五階にたどり着いた。保安所の前に刺さっている線量計を引き抜いて、首に掛けた。この手の施設を使う時の、身についた習慣として、ほとんど無意識にそうしたに過ぎない。いつも通り、線量計を手にとつて、数値がゼロを示していることを確認し、南部はその手を止めた。被曝の制限をどれだけ越えようが、今回は最後まで作業をするしかない。

「モニターする意味は無いかもしれないな……」

——南部、どうした？

「いや、何でもない。十五階の保管庫を開けたい。見たところ暗証番号のようだが……」

——日替わりの暗証番号だ。これから読み上げる。

言われた通りに番号を入力し、南部は保管庫に入った。把手のついたケースに入ったプルトニウムを持ち、配線用ダクトへと向かった。

● PHASE 17 R & D センター・地下二十階

南部は、保管庫のあるフロアを往復し、保管されていたプルトニウムを全て地下二十階に運んだ。薬品庫からは金属ナトリウムの瓶を持ち出し、他のものは地下十九階の実験室から調達した。

プルトニウムのケースを乱雑に散らかしたまま、階段下の作業場所から作業台を引っ張り出した。廊下を引きずって、問題の箱に一番近い場所まで運んだ。別の小さな机も引っ張り出し、作業台を置いた反対側の廊下の壁にくっつけて配置した。円柱状のプルトニウムを取り出して、地下十九階で見つけた洗面器の片側に寄せてガムテープで固定した。折りたたみの梯子状の踏み台を作業台の上置いた。プルトニウムの残りをガムテープで束ねて、紐で縛り、踏み台の上部を通して下に引っ張り、反対側の机の脚に結びつけた。紐が切れば、プルトニウムの塊がまとめて作業台の上に落下することになる。

——南部君、一体何をしているんだ？

「ここでプルトニウムの臨界を起こさせるんだ、アンダーソン。これだけあれば十分だ。私は壁を抜けるんが、中性子は抜けるからな」

——そんな……。

「壁の向こうのウィルスを殺すのに、他に何か方法はあるか？ さつさと周辺に避難命令を出せ」

——剥き出しの原子炉を作るつもりか！

「アメガポリスを全滅させて世界を破壊に導くのと、臨界の後始末と、どっちがマシかよく考えろ！ 何のためのISOだ！ 放射能除去は普段やってる仕事だろうが！」

通信機越しに叫んだ長官に向かって、南部は怒鳴り返した。

爆発で散乱した白衣をナイフで切り裂き、金属ナトリウムの試薬瓶に満たされていた灯油に浸して、紐に結びつけた。白衣の切れ端を床に垂らし、その下に大型の濾紙を置いて、金属ナトリウムをナイフで取り出して接触させた。別の濾紙を切り、一部を重ねて床に配置した。二つの机にホウキの柄を渡し、ガムテープで固定し、実験用蒸留水のボトルに小さな穴を空けて針金で吊した。水が、重ねた濾紙の端に規則的に落ちていることを確認してから、南部は、洗面器に入れたプルトニウムを踏み台の下に置いた。紐が切れた時に落ちてくるはずのプルトニウムが、洗面器中のプルトニウムの出来るだけ近くに落ちるように配置する。

「今紐が切れたら死ぬな……」

南部は、洗面器を置いて静かに後ずさりした。水が

順調に床に落下しているのを見て、階段を駆け上がった。

——南部君、何をやってるんだ……。

「監視カメラで見えてくれ。私が作ったのは簡単な時限発火装置だ。ボトルから落ちる水が濾紙を濡らし、滲みていつて金属ナトリウムに接触すると激しく燃える。灯油を浸した布きれに火がつき、その火で紐を焼き切るんだ。吊したプルトニウムが洗面器の中に落ち、既に入れてある分と一緒になれば、臨界は越えるはずだ。しかし、核爆発は起こさない。建物の中に居たら被曝するぞ。レスキュー隊を直ぐに全員撤収させろ！」

言いながら南部は廊下を走った。地下十九階の機械室から配線ダクトに入り、梯子を上った。既にダクトの中には煙が充滿していた。南部は、入って来る時に使った小型の酸素ボンベを啞え、目を半ば閉じながら梯子を上った。籠もっている熱気で汗が吹き出した。地下十四階付近で、梯子を握る手袋の表面が熱で溶け始めた。構わず駆け上がる。酸素が途中で切れた。南部は、酸素ボンベを投げ捨てた。梯子の温度は多少下がったが、溶けた手袋は手に貼り付いている。地下十階の機械室にたどり着き扉を押して廊下に出ると、南部は激しく咳き込んで床に転がった。火

災で発生したガスを吸ったのと、激しい運動の両方で、息が苦しくてたまらなかった。持ってきていたカバンも、ベルトに挿していた拳銃を廊下に放り出し、腕に通していたガムテープも外した。貼り付いている手袋を外して捨てた。懐中電灯は、シャフトを駆け上がる時に落としてしまったらしく、見当たらなかった。身軽になつて、やつと南部はよろよろと立ち上がり、壁に片手をついて歩きながら、エレベーターへと向かった。

レスキュー隊が残っていた縄梯子に腕を引つけたまま、南部はその場に崩れ落ちそうになった。目の前が暗くなり、上下がわからない。火災で発生したガスを吸って一時的に平衡感覚を失ったのだ。それでも、上に向かうしかなかった。南部は、手探りで縄梯子を上り、エレベーターのケージの上に這い上がった。

「ISO本部の周りを二十周じゃ足りなかったか……素直にグラウンド二十周しておくべきだったかな」

レスキュー隊が残っていたロープが数本に縄梯子二本、ケージの上まで届いていた。

咳きながら、南部は、一階から降ろされている縄梯子にしがみついた。

● PHASE 18 I S O ・ R & D センター・一階

警備室は大騒ぎになっていた。被曝の危険があるため、最低限の人員を残して退去命令が出された。I S O 長官は、周辺ビルの地下への立ち入りを禁止するための手配に追われていた。幸いなことに、センター周辺もI S O の施設で、商業地域や居住区は離れていたため、とりあえずの対応はI S O 内部だけで済んでいた。クリスマススイブで残っている人が少なかったことも、混乱の拡大を防いでいた。

慌てて撤収してきたレスキュー隊は、耐放射線防護の装備を身に付けるのにてんやわんやだった。警備室には線量計が運び込まれ、I S O の原子力工学の科学者と技術者には、アンダーソンから緊急招集がかかった。

これまで、両手を白くなるほど握り締め、黙って南部と警備室のやり取りを聞いていた鷺尾は、ヘルメットを机の上に置いて、エレベーターに向かって駆けだした。

「どこへ行くんだ？」

アンダーソンは呼びかけた。

「南部を迎えに行く。もうそこまで来ているはずだ」
「危険だぞ」

「科学者同士の話に俺が口を挟んでも役立たないから今まで黙っていたが、これに関しては好きにさせてもらう」

「待て」

「止めるのか？」

「私も一緒に行くぞ」

廊下に出たアンダーソンは、サーベイメーターを持って待機しているレスキュー隊員に声をかけた。

「一人脱出してくる。手を貸してほしい」

鷺尾とアンダーソンは、エレベーターシャフトを覗きこんだ。一階から降ろされた縄梯子に、ケージの上に立つた南部が捉まっていた。

「おい、南部、上れるか？」

鷺尾が呼びかけた瞬間、爆発音が聞こえた。エレベーターシャフトのあちこちから火花が上がった。縄梯子を上がりかけた南部の体が跳ね、そのままエレベーターケージの上に倒れ込んだ。

「何があった？」

「地下十四階で爆発。フラッシュオーバーです」

アンダーソンの叫びに、警備室から誰かが答えた。

「感電したんじゃないか、今の爆発でどこかの配線が壊れて……」

鷺尾は、一瞬時計を見た後、反射的にロープに飛び

つき、懸垂下降を始めた。「君までやられるぞ！」というアンダーソンの叫びは無視し、壁を蹴って下まで降りた。ロープの端を自分の足と胴に回して結びつけ、さらに余った部分を南部の腰に巻いて結んでから、南部を抱き上げた。

「引っ張り上げてくれ、早く!」

レスキュー隊員と一緒にあって、アンダーソンは力一杯ロープを引っ張った。一階に引き上げられた南部は全く動かない。

除細動器を持ったレスキュー隊員が近付いた。鷲尾は、南部に結んだロープをほどいた。アーミーナイフを出し、南部の左腕のブレスレットのベルトを切り、ナイフの柄でブレスレットをたたき壊した。一瞬光に包まれて、南部のスーツが元に戻った。

「こういう新製品らしい」

白哲といったほうが似つかわしい南部の顔は、普段よりもさらに青ざめて血の気を失っていた。

鷲尾は、南部の黒いシャツを上までめくり上げ、胸をただけさせた。胸に耳を近づける。心音は聞こえない。呼吸も止まっている。

「頼む」

一言だけ言って、南部から離れた。近付こうとしたアンダーソンの腕を取って止めた。

レスキュー隊員が手早く南部に接点を貼り付けた。全員が離れたのを見てスイッチを入れた。南部が仰け反る。

「戻ったか?」

鷲尾は訊いた。

「だめです」

「電圧を上げる。もう一回!」

スイッチを入れたのと、警備室からけたたましい警報が鳴り始めたのが同時だった。

「何事だ!」

「臨界に達しました! 放射能漏れの警報です」

「こつちも戻りました」

レスキュー隊員が叫んだ。別の隊員が、南部に酸素マスクを押し当てた。鷲尾は時計を見た。飛び出してから一分五十秒。このまま回復すれば、障害は残らない。

外に出ていたレスキュー隊員が担架を運んできた。南部を載せて持ち上げた。眼鏡の奥で南部がゆつくりと目を開いた。

「気がついたのか?」

「南部君、私かわかるか?」

鷲尾とアンダーソンが呼びかけた。南部は、担架を持ち上げるレスキュー隊員の腕を掴んで、起き上がる

うとした。

「死にかけてたんだ。寝てろ」

鷲尾は、南部の腕を握った。

「それは本当か？ プルトニウムはどうなった？」

「臨界に達したらしい」

アンダーソンが答えた。

「見届けさせてくれ」

「担架を一旦警備室へ！」

一瞬ためらった後、アンダーソンは隊員達に声をかけた。このまま南部を無理矢理救急車に押し込んだら、抜け出そうとして一悶着あるのが目に見えていた。

長官と警備主任が、微動だにせずモニターを見つめていた。南部が置いてきた容器の周辺が、青い光を放っていた。モニター室の放射能レベルを示すパネルは軒並み赤ランプが点灯し、警報ブザーが鳴り響いていた。

「南部博士……」

警備主任が、担架で運ばれてきた南部を認めた。

「タイムリミットまであと何分ある？」

「焼却が始まるまでに三十分を切りました」

「充分だな。たかだか数センチメートルのコンクリートの壁と数枚の金属板と断熱材ごときでは、至近にあ

る臨界の中性子を防ぐことなどできん。遺伝情報はずたずた、修復など不可能だ。間違い無く死滅するだろう」

「チェレンコフ放射は始めて見るが……」

長官が呟いた。

「ISOの長官がそれでは困ります。今画面に出ているものは、物理現象としてはむしろオーロラに近いでしょう。チェレンコフ放射というのは、いわば光の衝撃波で……」

「南部君、その話はまたの機会にしろ」

長官に向かって担架の上から講義を始めようとした南部を、アンダーソンが慌てて止めた。

「物理の講義以前に、何だこの被曝量は」

アンダーソンは、南部が首から下げている線量計を手に取り、南部に突きつけた。

「多少の影響は出るだろうが、急性障害を起こすほどの量じゃない」

「被曝の管理が生涯モニターなのはわかっとなるな？

長官もいらっしやることだから、この際言っておく。ISOに居る限り、核関係の研究に直接携わることを禁止する。これは業務命令だ。無公害エネルギーの開発をしたいのなら、マントルエネルギー利用の方を進めるんだな」

「仕方無いな。まあ、私には他にもやる事が……」

南部は左腕を上げた。プレスレットは無かった。

「緊急事態だったので俺がたたき壊した。元に戻さないと除細動器も使えなかったのな。また作れるんだろう?」

「休暇中の仕事は無くなったな」

南部は渋い表情で天井を見つめた。

「ISOが南部をこき使っているわけじゃないんだな……」

鷺尾は溜息をついた。

「南部君をこき使っているのは本人の才能だ。あまり神様に愛されるというのも考え物だな。さつさと連れて行かれたのでは話にならない。戻ってきてくれて本当に良かった」

「今日はクリスマス・イブだぞ。神様はやってくる方だろう。連れて行く方じゃない」

大真面目に混ぜっ返した南部を、アンダーソンと鷺尾は揃って睨みつけた。

焼却処理が始まり、P4内部を映していた映像が切れた。

「もういいだろう。病院へ運べ。私が付き添おう」

アンダーソンは、担架の脇を持つて建物の外に出た。

「ハリアーを戻して始末書を書いたら俺も行く」

鷺尾は駆け出して行った。

「本当にいいのか? イブの夜だ。家族にプレゼントだつてあるのでは……? 私はあなたの家族に恨まれたくないぞ」

「でかいプレゼントを寄越した張本人が気にするな」

訝った南部に向かって、アンダーソンは続けた。

「アメガポリスと世界中の人々の命を繋いだんだ」

高層ビルに混じって、ライトアップされた教会の塔がいくつもそびえ立っていた。

「見えるか、南部君。君が守った人々の、ミサがもうすぐ始まるぞ」

「……ああ。これからも、安心してクリスマスを祝える世界であつてほしいな」

● PHASE 19 エピローグ

—— 数日後。

アメガポリス市内のレストランで、南部は、アンダーソンと鷺尾と一緒にテーブルを囲んでいた。

「無事に回復して良かったな」

アンダーソンの合図で、シャンパングラスを手に三人で乾杯した。

たんだ。P4の区画を丸ごと切り離して安全なところに運んで処分することだつてできたかもしれない」

南部は、シャンペングラスを一気におつた。

「技術は進むからいつかはそういうことが出来るようになるだろうが、相当な研究開発が必要だぞ。南部君がISOで研究を続けたとしても、難航するだろう」

アンダーソンは、南部のグラスにシャンペンを注いだ。

前菜が運ばれてきた。南部は、ナイフとフォークを手にした。

「まだしばらく時間はあるだろう。やれることをやるだけだ。これも含めてな」

勢いよく料理を口に運んだ南部を見て、アンダーソンと鷲尾は揃って吹き出した。

— 完 —

あとがき（ネタバレ注意）

前々から、南部博士のバトルスーツ開発話をやってみようと思っていたら、ちょうどみなさんがクリスマスフィクを出し始めたので、チャレンジしてみることになりました。しかし間に合わなくてクリスマスは終わってしまったわけですが（汗）。

時期的には、南部博士がISOに来たばかりで、マントル計画も始まっておらず、アンダーソンもまだ副長官というのを想定して書きました。忍者隊候補を集め始めるちよつと前の話です。

デーモン博士との因縁話を試しに入れてみたり、何でマントルプランに力を入れていたのかというネタも組み込んでみたり、まあちよこちよこと遊んでみました。

本編で登場する司令官然とした南部博士じゃなくて、もつと若い南部君のイメージで書きました。

アクション物のフォーマットで書いたので、主人公の南部博士は連続トラブルに見舞われねばならず、且つそれをクリアせねばならず、どういうネタでいこうかとか、本編とのすりあわせとか、伏線の回収とか、それをどうやって読者にわかってもらおうとか、いろいろありました。ベタな展開なのは作者の力不足です。ついでに、他の南部博士ファンの皆様、イメージ

崩しちゃったかも。こんな南部博士になっちゃって済みません(汗)。

アクションの制約はきっちり入れました。いくら若い頃だといつてもバードスーツの試作品を着た南部博士に忍者隊並のアクションはさせられない、というかやっちゃったら忍者隊要らないってことになって、フィクとして成り立たない。第一、フィクの目的としては、普通の人がちよつとがんばったくらいじゃ追いつかないから特殊な訓練をされた忍者隊を組織することにしたら、つていう南部博士の結論が出てこないといけない。

そうすると、大部隊が銃で襲つて来るのを相手にするようなシーンはダメだけど、南部博士の射撃の腕が良いのはFの描写からはつきりしてるから、静止したのを撃つのが上手いのはOK。スーツによる運動能力の補強があるから、普通の人よりは飛べるけど、ジャンプ力としてはせいぜい一階分(床から天井にジャンプして上の階によじ登る)くらいならOK。普通のビルのフロア内で床から天井までの範囲でのアクションはOK。高低差のあるところの移動は梯子か階段かロープを使う。平らな場所でのランニングは勿論OK。大勢を相手の格闘戦は不可、むしろ格闘戦には不向きという描写を、スーツ開発状況の説明

と合わせて最初に終わらせておく。また、博士が主人公だから問題への対処は力押しはできるだけ避けて、知識とか知恵とか技術とかで切り抜けるのが基本で、それができない場合は走って逃げるか隠れるかする。つまり、アクションアドベンチャーの主人公の運動能力とかを決めるのと似たような感じでやりました。

今回の舞台となったR&Dセンターでの救出ミッション、もし忍者隊がやれば、最初のエレベーターダクトは飛び降ながらブーメランとか武器を投げてセキユリテイを破壊すればいいし、移動が早いから多分ノーダメージで配線ダクトまでたどり着くだろうし、ダクト内の移動は必ずしも梯子を使わなくても適当に飛び降りるとか、階段もジャンプして時々飛梯子に取り付くだけでいいし、閉じ込められた場合の破壊はジュンの爆薬一発で終わりでしょう。最後のP4のクリアが問題ですが、地中を進めるメカがあれば、制限時間内にP4ごとビルから切り離してしまつて別の場所に運んで救出するなり処分するなりといった手が使えるかも。

元ネタ&ネタバレ集

ブルトニウム二三九からウランを作る工場をIS Oが持っているという描写が、ゲゾラ大作戦（後編）で登場。

バイオ関係の実験設備については、「謎の赤い砂」の回で、赤い砂の正体を突き止めたりしているから、南部博士自身もそれなりの素養はあるだろうし、IS Oが設備を持っていても不思議ではない。

最後の、金属ナトリウムを使った時限発火装置のアイデアは、Leonard A. Ford, "Chemical Magic 2nd. Ed." DOVER より拝借。

とりあえず公開版。

二〇〇九年 十二月二十七日 ver.1.0

後書きを追加した修正版。

二〇〇九年 十二月二十八日 ver.1.1

エピローグを大幅追加してより解りやすく本編に接続。

二〇〇九年 十二月二十八日 ver.1.2

台詞をちよつとだけ変更。

二〇〇九年 十二月三十日 ver.1.3

初代の本部ビルの場合が間違っていたというところでもないミスが。てっきりユートランドにあると思っていたら、七九話のナレーション「アメリカ国が誇る巨大都市アメガポリス。その都市のほぼ中央に、国際科学技術庁の本部がある」。九四話で竜が健、ジュン、甚平に見送られて列車に乗るシーンでのアナウンス「ポートランド經由アメガポリス行き列車は間もなく発車いたします」。諸君の住居がユートランドだとすると、列車は、ユートランド↓ポートランド↓アメガポリス（本部）、の経路で走っていることになる。ということと修正。

二〇一〇年 八月三十日 ver.1.4

裕川 涼